

Stay hungry, stay foolish

| | |
|-----|---|
| 著者 | 猪股 成彦 |
| 雑誌名 | 東北学院英学史年報 |
| 号 | 37 |
| ページ | 79-81 |
| 発行年 | 2016-03-15 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1204/00000520/ |

Stay hungry, stay foolish.

猪 股 成 彦

私が育ったのは東京西部に位置する米空軍基地がある町です。町に基地があるのか、基地の中に町があるのか微妙ですが、「英語」を生業とし、どうか今まで生活できている私の基礎を作上げたのがこの環境ではなかったかと思っています。

高校受験で悩んでいた頃と米軍がベトナムから撤退し始めたのはほぼ同時期でした。ただ、サイゴンが陥落し泥沼の戦争が終結して、町の雰囲気が変わったかと言えばそうでもなかったように記憶しています。当時、夢中で聴いていたFEN（現AFN）では相変わらずWOLFMAN JACKがダミ声を張り上げ、Casey KasemはAmericanTOP40で脳天気にかントリーを流し、駅前のMacdonaldは米軍家族で満杯でした。おそらく何かが変化したのですが、十代の私にとっては遠く南シナ海から飛んでくる穴の空いたファントム戦闘機の姿だけが、その変化の一つだと理解していたのかも知れません。

1983年大学受験にあたり高校に相談に行ったのですが、その時「お前の成績で英語を勉強したいのなら、仙台にある東北学院大学に行きなさい」と言われました。今から思えば学院大には大変失礼な言い方ではありますが、当時の私は未知の土地に憧れていたこともあり、素直に学院大を受験し、大学側はそんな私を拾ってくれたのです。21歳の時でした。

英語が好きとは言っても平均的な成績でしたし、基地のある町で育ち、生の英語を耳にする機会が多かった程度で取り立てて優秀なところはありませんでした。4年生になり、現在早稲田大学で教鞭をとっているJ. M. Verdaman先生のゼミに入ることになりました。その出会いがその後の私に大きな影響を与えたと思います。

Verdaman先生はJack LondonやE. M. Hemingway等を扱い、私は特にHemingwayの初期の短編に面白さを感じました。様々な物語を読み、そのレポートを英文で書く宿題が毎回出されたことが思い出されます。まともに作品に対峙しては並なレポートには勝てませんから、その頃多少持ち合わせていた想像力を駆使し、他とは異なった視点から挑戦していました。ただ、大学では、根拠を元に理論立てなくてははいけません。どこまでできたかは定かではありませんが、Verdaman先生にはよくお褒めの言葉を頂いたのを覚えています。

大学時代には、宣教師の先生方にも大変親切にしてもらいました。度々家に招かれ、特に花京院にあった家を訪れたときには驚きの連続でした。団地育ちであった私は、瀟洒な洋風外観に驚愕し、室内の大きな暖炉に唖然とし、初めて口にする感謝祭のターキーサンドの味に感動したのです。

授業では、宮城の民話を英訳するものがありました。音声学にはあまり興味は持てませんでしたが、この授業に関しては難しいながら、その面白さに惹かれていました。その後教壇に立つことになる私の授業のアイディアに少なからず影響を与えてくれたクラスでした。

学院大を卒業し一度は地元で就職しましたが、教師を諦めることができず、再度宮城県の教採試験にチャレンジしました。世の中はバブル景気のまったなかであり、公務員になろうなんて誰も思わない時代が幸いし、私はめでたく教員になることができました。

初任地は石巻の夜間定時制高校でした。ご多分に漏れずやんちゃな生徒を相手に授業よりも生徒指導に追われる毎日でした。こんな生徒達を相手にする授業を成り立たせるため、学校からお金をもらいオリジナルの教科書を作成したこともあります。生徒たちの興味・関心を喚起するためのアイディアの根源はやはり学院大の授業にあったと思います。

定時制高校、普通高校、社会教育主事を経験し、2012年宮城県庁国際・経済交流課へ異動となり、海外からの来客受入業務、翻訳、そしてJETプログラム（ALT受入）を担当することとなりました。月に数回、そして震災後

は週に何度もあった要人受入に際しての私の仕事は、大使館や海外から送られてくる英語の公文書の翻訳で、これには大変に苦勞をしました。何人かの上司の目を通して私の翻訳はチェックされていくのですが、当時の課長が英語に堪能であり、初めはかなりダメ出しをされました。文面通り翻訳をすればいいのですが、多少人より勝っている想像力を働かせながら、ネットやあらゆる根拠資料をもとに翻訳をする必要がある場面が多々ありました。この時の作業においても、資料を参考にレポート作成に悪戦苦闘していた大学時代の勉強が役立ったと思います。

現在は、英語を使用することはほとんどなくなり、どちらかと言えば事務処理能力（これは慣れれば簡単）とコミュニケーション能力が求められます。今の職場には教職員90名近くおり、仕事をする上で個々の「人」を見ながら対応する必要があります。東京を離れ、異国？東北の地において、成育環境の全く異なる、そして個性的な仲間や先輩方と大学時代を過ごしたことが、今日必要なコミュニケーション能力を大いに伸長させてくれたと信じています。

最後になりますが、この仕事をしていてよく学院大出身者に出会います。東京が地元の私にとって中学や高校時代の恩師先生や先輩といった方々とは無縁な反面、学院大同窓との接点は多く、様々な場面で手助けを頂いています。今後もそれは変わらないでしょう。また、学院大を卒業し、東北の社会で活躍している昨今の教え子たちを見るに付け、多様な価値観を認めながら、国際的な視点で学生を育てている東北学院大学130年の校風がこのようなグローバルな人間を作り上げているのではないかとも思っています。